

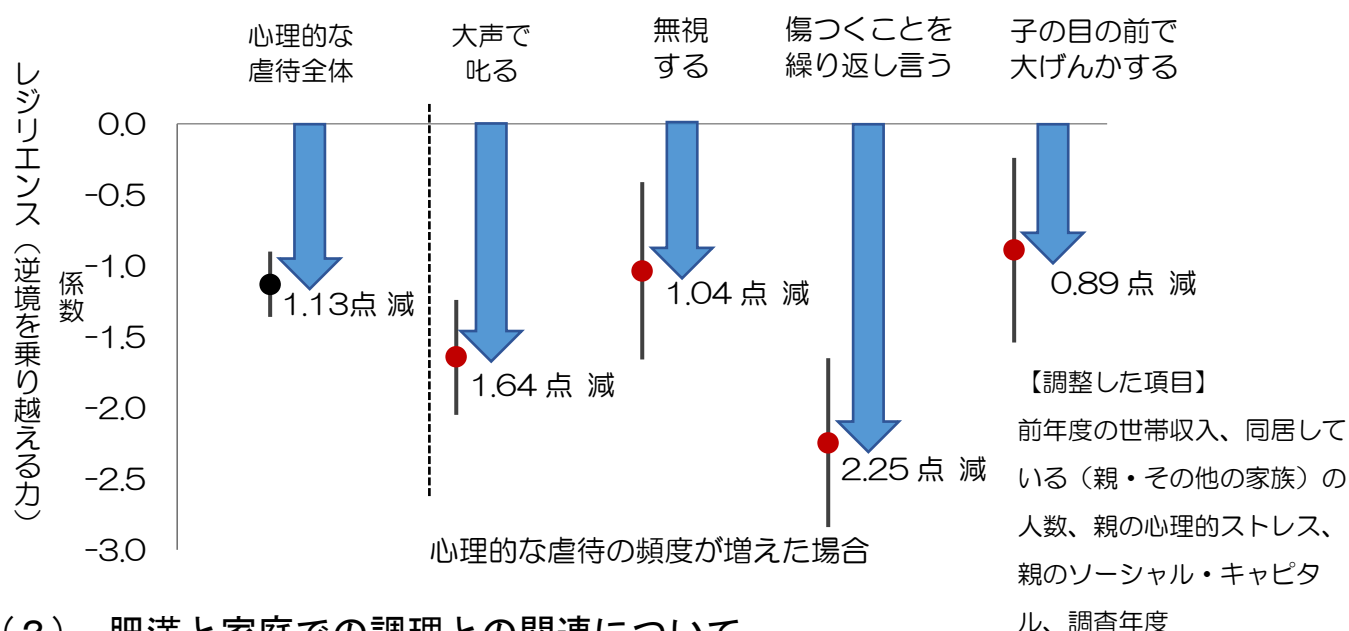
第3章 今後の対策に向けて

1 8年間の調査から見た傾向

平成27年度の調査スタート時の小学1年生を中学2年生になるまで継続して定期的に調査を行ってきました。その中で東京医科歯科大学及び国立成育医療研究センター研究所による結果の集計・分析の結果から見てきた傾向について記載します。

(1) 「心理的な虐待」がもたらす影響

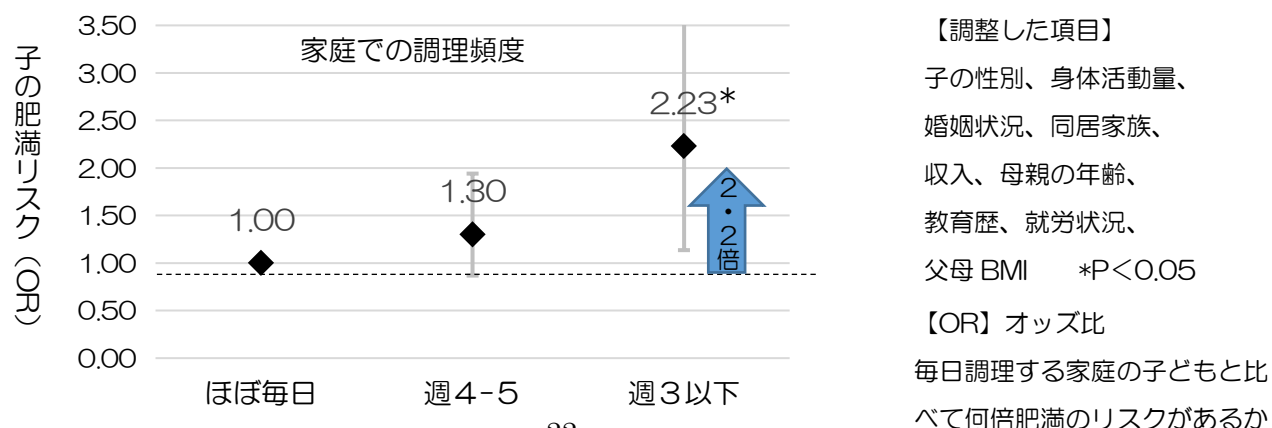
子どもに対する虐待には、「身体的な虐待」「ネグレクト」「心理的な虐待^{注1}」などがあります。ここでは「心理的な虐待」に注目して、逆境をのりこえる力（レジリエンス）への影響をみたところ以下のグラフのようになりました。項目ごとの結果から「傷つくことを繰り返し言う」といった「ことばによる暴力」がレジリエンスを大きく低下させることがわかりました。



(2) 肥満と家庭での調理との関連について

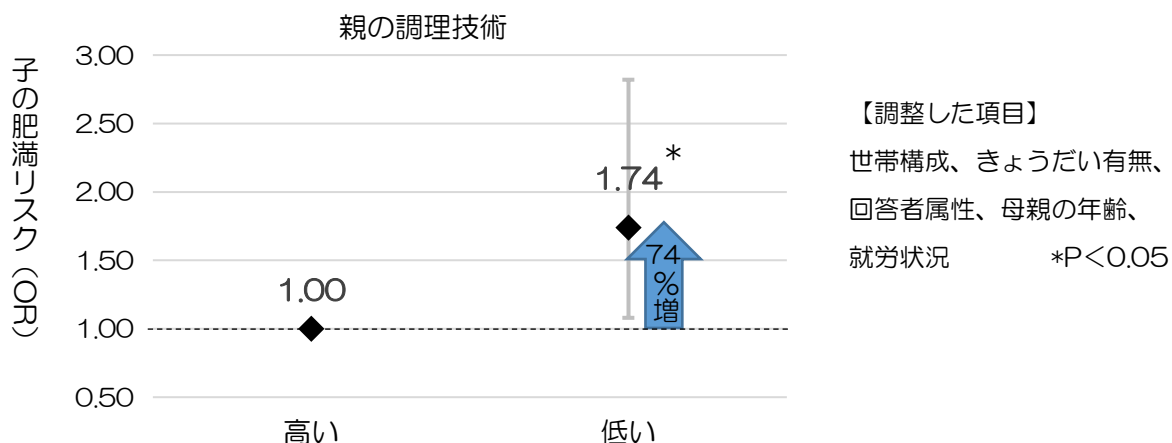
ア 家庭での保護者の調理頻度

家庭での調理頻度が子どもの肥満に関係していることが分かりました。「ほぼ毎日」食事をつくる家庭の子どもと比べて、「週3回以下」の家庭の子どもは肥満のリスクが約2倍高い結果になりました。



イ 親の調理技術

親の調理技術が低い場合、高い家庭に比べて子どもの肥満のリスクが上がるということが分かりました。



※「P値」という言葉について

ある物事の関連が偶然によるものかどうか、を判断するうえで用いられるのが「P値」です。多くの研究などでは、P値が0.05未満の場合に、物事と物事との関連がない確率が非常に低い（つまり関連がある）と判断されています

2 小学1年生からの追跡調査を終えて

長期にわたり調査を行う中で見えてきた分析結果から、子どもの成長に「ことばによる暴力」が悪影響を及ぼすことが分かってきました。「心理的な虐待」が子どもたちの行動に大きく関わってくる事を保護者だけではなく、子どもたちの成長に携わる多くの大人に知ってもらうことが大切です。そのためにも今後は、まず保護者や地域社会等への啓発を進めるとともに、親の子育てに対するサポート体制や地域における子どもの健康づくりの施策もあらたに展開していく必要があります。

また、既に取り組みを始めている施策についても、より充実を図る必要があります。家庭での調理では、子ども自身が朝食等を作ることができるスキルをさらにアップさせたり、「ひと口目は野菜から」などの取り組みを進めることで、肥満防止の効果も期待できます。

子どもたちが将来の夢や希望を実現するための土台は「健康」です。好ましい生活習慣を身につけられるよう、「未来へつなぐあだちプロジェクト（足立区子どもの貧困対策実施計画）」を一層充実させてまいります。

注1 子どもたちの心を傷つける不適切な言動